

眠る王国パル・アテ

眠る王国パル・アテ

日が暮れ、村中が闇に覆われるころ、暗闇の中でほのかな光を灯す小屋がある。その中で一人の少女が、さまざまな花や草を並べていた。明日、町で売るためのお香を作る準備をしている。安らぎの香りが小屋中を満たしていた。少女は、一本一本の材料に、話しかけるように、大切に扱っていた。

突然、少女は作業を止め、家の中を見回した。

「空気が殺気立っている」

少女が嫌な感覚に見舞われたため、部屋の明かりを消した。

静寂な暗の中で少女はこの不気味な時が過ぎるのを待っていた。そして、背筋が凍るような恐怖に堪えていた。

突然、扉を強く叩きつける音がした。

「開ける！」

男の怒鳴る声がした。心を砕くような声であった。

「居ることは知っている！」

少女は恐怖で震える体と闘いながら、床下の通路から小屋の裏側に出た。そして、湿地帯の方へと全力で走った。

「いたぞ！」

別の場所で待機していた男が、走っていく少女を見付けて叫んだ。すると数人の男が集まってきて、逃げる少女を追った。銃声が2回、夜空を駆け巡った。

「ああっ！」

少女は恐怖で声を上げた。それでも、その恐怖に堪え、暗闇の中を走り続けた。そして、あらかじめ探しておいた湿地帯の中の逃げ道を必死で駆け抜けた。少女は、この時に備え、あの小屋から逃げる訓練を、何度も繰り返ししてきた。

この底無し沼で有名な湿地帯が、自分を守ってくれる、そう信じて、必死に走った。しばらくして、追いかけてくる男達の姿は見えなくなった。

少女は逃げ切れたことを確信した時、緊張で押えつけられていた涙が溢れてきた。